

## 天声人語

ある『言海』は、起草から完成まで16年を要した。ほぼ単独で成し遂げた大槻文彦にとつての難問は、新しい語のうち、どれを載せ、どれを捨てるかであつた。仕事を進めた明治前期は次々と新語が生まれた時代だった▼大槻の評伝『言葉の海へ』（高田宏著）によると「自転車」「ペケ」「すばらし」などが採用され「園遊会」「すてき」は見送られた。ペケの意味は「横浜居留地二行ハルル訛語」、「可カラズ」トイフ意ヲナス。外國との接点から広がった様子が伝わってくる▼新語を選ぶ苦労は今も変わらないようだ。10年ぶりに改訂される広辞苑では「安全神話」「婚活」「ちやらい」などが載ることになった。一方で「つんでれ」「ググる」は落選した。当落線上に多くの語があったのだろう▼「やばい」の説明には「のめり込みそうである」が加わった。危ないわけではなく、好ましいことが起きたときに若者が連呼するようになつて数年がたつ。感嘆詞のように使われている気がするが、さて広辞苑の解釈は定着するか▼今回の改訂版で予定される発行部数は、ピーク時の10分の1にとどまるという。無料で何でも検索でき、辞書が売れない時代である。電子版の売り上げも、紙の穴埋めには遠いといふ。言葉の変化にあわせて改訂が続けられるのか、少し心配になる▼言「海」、大辞「林」、大辞「泉」。辞書の名には自然の広がりや深さがある。荒れずに朽ちずに言葉を守り続けられるか。

2017・10・27